

# マックス・シェーラーにおける幸福の概念について

吉 村 重 紀

はじめに

マックス・シェーラー（一八七四—一九二八）は、主著『倫理学における形式主義と実質的価値倫理学』（一九一三—一九一六）の中で、幸福の問題について考察している。幸福の問題については、多くの倫理学者がそれぞれの思想を展開してきたが、シェーラーの場合、それは価値、感情、道徳的善との関連において扱われる。

## 一、価値と感情について

シェーラーの実質的価値倫理学における幸福は、快樂主義的幸福主義にあるような快樂の寄せ集めとしての幸福ではない。シェーラーは価値序列、感情層といった独自の考え方を通して、幸福を価値との関係において明らかにする。

### （一）価値序列

シェーラーの考えるところでは、価値は現実界の背後で秩序だった独自の領域、すなわち価値界を形成するものであり、それは現実という存在形式へ入り込み、我々の前にたち現れる。シェーラーは

この価値界の秩序を二つに區別する。一つは、諸価値の高さが本質的な担い手の点で規定され位階的に秩序づけられたもの、そして今一つの秩序は、価値様態という、価値性質の諸系列それぞれの最後の統一で成り立っている純粹に実質的な秩序である。第一の秩序には、人格価値や徳価値、作用価値、機能価値、状態価値などが挙げられている。このうちの人格価値は第二の秩序も含めて一番高い価値とされる。価値は独自の領域、価値界にあるのだが、それは人格の価値認識作用によって捉えられて初めて、我々にもたらされる。したがって、諸価値とその位階はすべて人格が決定づけていると見ることが出来るわけで、ここから人格価値が諸価値の中で最も高い価値とされるのである。

シェーラーの価値序列とは先に述べた第二の秩序、すなわち価値様態の位階的な秩序のことをいう。人間は己れの人格の作用によって価値を捉えるのだが、人格の作用が狂ってしまったら、真正な価値を捉えることができない。第二の価値の秩序は狂った人格作用ではなく、真正な人格作用によって我々もたらされる真正な価値の秩序のことである。

シェーラーの価値序列は、次の四つの価値様態で表される。一・快適価値、二・生命価値、三・精神価値、四・聖価値。この順序は価値の高い低いの順位を表しており、その順位は、価値の持続性、分割の可能性、基礎づけ性、満足の深さによってつけられる。また、それぞれの価値様態にも積極的価値と消極的価値があり、積極的価値のほうが高い価値とされる。

快適価値は、快適・不快適という価値系列であり、感性的感得機能によってもたらされる。

生命価値は生命感得作用によって捉えられる諸価値のことである。この価値が何らかの対象に現れる場合には、それらは高貴と卑俗の対立によって包括される。

精神価値の価値様態にある諸価値は、我々にもたらされる形式において、身体、および環境世界から或る独自の仕方で分離し、独立性をもっている。これらの諸価値を捉える作用や機能は、精神感得

の機能や精神的先取、および愛憎の作用である。これらの価値の主要な種類には、「美」と「醜」の価値、「義」と「不義」の価値、純粋な真理認識の価値がある。

聖価値の価値様態には、聖又は聖でないという価値がатарる。この価値の諸性質は志向において、「絶対的な諸対象」として与えられている諸対象に即してのみ現れる。我々に聖価値をもたらず作用は或る特定の類いの愛の作用なのだが、その作用は諸人格、すなわち人格的な存在形式をもつものに係わることを本質とする。したがって、「聖」の諸価値においてその価値性格を本質的に保持しているのは人格価値といふことができる。

これらの四つの価値様態は、価値認識作用、すなわち感得や先取・後置、愛憎などの価値感情によって我々にもたらされるのだが、この価値の感得は感情状態をひきおこす。シェーラーは、感情状態を、常に価値の感得によってひきおこされたものであると定義する。そして、さらに感情状態を自我被関係性の差異にしたがって四つの層に分ける。この自我被関係性とは、感情状態がもとと自我のもとにあり、自動的に自我と結び付いていることをいう。

感情層には感性的感情、生命感情、純粋に心的な感情（純粋な自我感情）、精神的感情（人格感情）があり、それらはそれぞれ快適価値、生命価値、精神価値、聖価値に対応する。また、それぞれの価値様態に積極的価値と消極的価値があるように、感情状態のそれぞれの層にも積極的な感情状態と消極的な感情状態がある。感情層は或る意味では価値序列を表していると言えるのである。

## (二) 感情層

シェーラーが自我被関係性の差異として注目するのは、感情状態の深さの差異である。例えば、人間は重苦しい苦悩の中でも喜ばしさを感じることができなのだが、その喜ばしさは持続せず、やがて重苦しい苦悩がその人を包んでしまう。深い苦悩と喜ばしさはともに自我に関係づけられていながら、

深い苦悩の方がより自我の深みに存在していて、周辺層の喜ばしさを凌駕してしまふのである。このことは、より周辺の層の変化は、より深層の感情にはほとんど影響を与えないことを表している。

一番の周辺層にあたる感性的感情は、快適価値の感得に対応して現れる。この感情はあらゆる他の感情と違い、身体の特定の場所と密接に関係し、一部分に与えられたものとして存在する。それは所属している感覚内容から解き放たれることがなく、同時に、対象なしでは存在することができないのである。このことは、この層の感情が、我々の意志によって「得られたり」、「避けられたり」するものであることを表している。つまり、より周辺層の感情は、我々の随意統制を受けやすいのである。次の層は生命感情の層で、これは生命価値の感得に対応して現れる。感性的感情が身体的一部分と密接に関係しているのに対し、この感情も依然として身体に関係してはいるが、特定の一部に関与するものではない。それは身体感情であり、我々の身体の統一意識である身体自我にたいして与えられる。我々はこの生命感情において、我々の生命自身を感得する。（例えば、生命の「上昇」と「下降」、「病氣」と「健康」、が与えられる。）生命感情は感性的感情に比べて、随意に変化させられることが非常に少ない。

次の層、純粹に心的な感情・自我感情は心的自我の直接的な性質、すなわち自我質であり、感性的感情、生命感情よりさらに深い層である。心的感情は身体の諸条件を変えても、ほとんど変化することがない。というのは、この層の感情は、創造された諸対象と密接に結び付いていて、それは身体とその諸条件にはほとんど無関係だからである。心的感情は先の二つの感情よりも、一層随意統制から免れている。

精神的感情は、シェーラーの考える感情層のもつとも深層にあたる。この精神的感情は、これまでの層の感情とは違い、自我の状態的なものとは無縁である。他の層の感情が、人格外の何らかの価値

の感得によってひきおこされるのに対し、この感情はそれらのものに相対的ではない。この感情はいわば絶対感情であり、精神作用の源泉の地点から湧き出て、人格の内界と外界の、そのつどの精神的作用に与えられるすべてのものに光と闇をふりまくのである。だから、我々は何かにについて喜んだり、喜ばなかったりするのと同じ意味で精神的感情を持つことはできない。シェーラーの精神的感情としてとくに重要なのは淨福 (die Seligkeit) と絶望 (die Verzweiflung) である。けれども、他の層の感情と同じように何らかの価値の感得によってひきおこされるのだが、一度存在してしまふと価値の感得に対応するものではなくなり、人格の核から我々の実存と我々の世界全体を充実するものとなる。その時には、我々はただ淨福であるか絶望してあるかのどちらかだけで、淨福や絶望を感じるといふわけにはいかない。淨福と絶望は我々の随意統制をまったく受けず、また内外の価値に影響されず、我々に与えられるのである。それらの土台をなしているのは人格価値である。淨福と絶望は、我々の態度によって獲得されるものではなく、逆にその態度を照らすものなのである。

以上のような感情層と価値序列の考え方をあわせて、次の二つのことが言える。一つは、感情が深層に近づくにしたがって、随意統制に従わなくなるといふことは、高価値よりも低価値のほうが、そして深い喜びよりもより周辺層の快のほうが、我々の手に入りやすいといふこと。もう一つは、人の意志に左右されず、聖価値に対応し、しかも人格価値を土台にした精神的感情は、形而上学的自己感情であり、このことが聖価値の実現の困難さと、人格価値の重要性の証しとなっていることである。

ここでシェーラーの考える幸福の位置を確かめてみよう。シェーラーは、幸福主義が快樂主義に結び付くことを次のように説明する。つまり、幸福というものが実質的な目標となり、それが人間に「感じられるもの」である場合には、感性的感情がもっとも容易につくりだされるといふ理由から、幸福は感性的快に帰着することになる。したがって、幸福主義は快樂主義に陥らざるえない、と。シ

エーラー自身も感情層の心的感情に幸福感をあげ、感じられる幸福の存在を認めているのだが、その上で彼は最も深い幸福を精神的感情の浄福とし、これを実質的価値倫理学における第一義的な幸福の概念とする。これは一、幸福が決して目標となるものではないということ、二、幸福が我々の意志によってもたらされるものではないことを表している。

この浄福が実質的価値倫理学の中でどのような倫理の意味をもつのか、さらに詳しく見るため、次に道徳的価値と幸福の関係についてのシエーラーの考えを見ていく。

## 二、道徳的価値と幸福

### (一) 道徳的価値論

シエーラーは道徳的価値を、他の一般的諸価値とは区別して考えている。これまで見てきたように、彼は一般的な諸価値は、単独の価値性質を持ち、価値物となつて我々の目の前に現れ出るものとするのだが、善悪という道徳的価値については、それを価値を実現する作用に背負われて出現する作用価値としてとらえているのである。すなわち、善は、より高い価値、積極的価値を実現しようとする作用に背負われて現れ、悪はより低い価値、消極的価値を実現しようとする作用に背負われて現れるのである。したがって、シエーラーにとっては、善をなそうとする道徳的意志といったものは存在しない。というのは、他の諸価値は、それ自身感得されて、意志作用の努力目標や実現目的を規定できるのだが、善悪はこの作用に背負われて初めて現れ出るからである。

シエーラーは、善悪を背負う価値を実現する作用として、特に意欲の作用を代表させている。価値を実現する作用には、価値を価値として見なす感得作用、何をもってより高い価値かとみなす先取作

用、また、その都度の状況や用いるべき諸手段に関する知的判断作用、さらには企てから実行に至るまでの一貫した意欲作用など、一連の諸作用がすべて含まれており、意欲作用のみがそれにあたるのではない。意欲はこれらの諸作用の最終項であると言う意味を持つに過ぎないのだが、シェーラーは最終項であるからこそ意欲を善悪の担い手として代表させるのである。だから、本来からすれば、善悪という価値は何らかの価値を実現しようとする一連の作用に伴って現れる価値なのである。

善悪が価値を実現する諸作用に伴って現出するというシェーラーの考え方においては、対象における価値が高いか低いか、または積極的か消極的かを把握することが重要になる。シェーラーは我々を価値界をつなぐものとして感得、先取・後置、愛憎の三つの価値感情を挙げている。これは感情状態とは明らかに異なるもので、三つのうち先取・後置と愛憎は道徳的認識と呼ばれる。

価値感情の一つ感得は価値へと自己を関係づける、あるいは自己を向ける目標を定めた運動のことである。この運動のうちで、我々に何物かが与えられ現出する。こう言った意味で、感得は価値相関者、すなわち価値あるものに対して、志向的な関係を持っており、この志向的感得の遂行によって、対象の世界の価値側面が我々に打ち明けられるのである。

先取と後置は、感得とは明らかに区別されるもので、情緒的かつ志向的生活のより高い段階として築かれる諸体験を言う。これらのうちで、我々は価値の位階、すなわち価値のより高くあることと低くあることを把握する。

愛憎は価値感情のうちでも最も重要なものであり、我々の志向的生活の最高段階にあたる。愛憎は価値対象に向かうので、その意味では価値応答的なのだが、感得や先取が現実にあらわな価値への志向であるのに対し、愛は対象の価値性質を必ずしも必要としない。愛は可能的価値対象、すなわち現実的には「価値なし」だが、「価値あり」となる可能性を持った対象へ向かう自発的作用でもあるの

である。また、愛とは、愛すれば愛するほど対象に既に与えられている価値により高い価値が増し加わるといったものであり、対象の中のものより高次の価値をめざす、より高次の価値を増進する創造力でもある。ただし、価値創造的と言っても、人間が愛によって価値を創造したり、廃絶したりするということではなく、愛が我々をア・プリオリな価値の秩序へ導くことを意味しているにすぎない。感得や先取はその主体の愛の指し示す価値、愛の創造した価値に基づき、あるいはそれに方向づけられ遂行される。したがって、愛なくしては感得も先取も成り立ちえないと言うことができる。愛は人格の一切の作用の最深・最高の源泉力であり、何を愛し、何を憎むかが当の人格の各自性を決定づけているのである。

道徳的認識とされる価値感情、すなわち先取・後置と愛憎は意欲が善であるか、悪であるかを決定する。シェーラーによれば、我々の意欲はそれが発動するところにおいてより高い価値を選び取る限りにおいて善なのであり、したがって意欲は発動するところに与えられている諸々の諸価値の実質のどれが高いかという、先取において与えられた認識を基準とするのである。この道徳的に洞察的な意欲は、愛に基づいて初めて生起すると言える。なぜなら、愛があればこそ、価値や価値の位階が与えられ、そこにおいて先取・後置、そして意欲が必然的に存在することになるからである。愛の存在は意欲の存在の本質必然的な前提条件であるのである。

また、ここにおいて次のことも明らかにになる。すなわち、意欲の善悪はその人の愛の在り方に従っている。正しい愛し方には、ア・プリオリな価値の位階が与えられ、誤った愛し方には誤った価値の位階が与えられる。その人の持つ価値の位階そのものが誤っていれば、意欲が善であるとは言えない。位階が与えられるという点で、愛は正しいにせよ、誤っているにせよ意欲の存在を必然的にするのであるが、その善悪は愛し方によるのである。



これまでは、善悪が諸作用に伴って現出する価値であるという考え方を見てきたが、シェーラーはこのことを踏まえた上で次のようにも言っている。「……そのみだけが根源的に善ないしは悪と呼ばれ得るもの、すなわち一切の個々の作用に先立って、またそれから独立的に善悪という実質的価値を担うものは、人格ないしは人格自身の存在であり、したがって私たちは担い手という観点からまさしくこう定義し得る。善悪は人格価値である、と。」この説明では、善悪の担い手としてはつきりと、人格価値と人格の諸作用の二つがあることが示されている。

シェーラーにおいては、人格は非対象的な作用存在、すなわち諸作用の遂行の中でのみ実存する諸作用の統一点であると考えられる。だから、善悪が作用に伴って現出する価値であるということと人格価値が善悪であるということは一つも矛盾しない。ただし、人格の諸作用と人格の存在はやはり同一のものではない。諸作用は部分的な人格の現れであるのだが、それはその都度過去のとなり、したがって客体化されてゆかざるを得ない。それに対し、人格の存在自体はあくまで全体的、主体的であって、決して対象化され尽くすことはないのである。人格は諸作用に先行しているとも言える。この人格の統一性、先行性において、シェーラーは人格の善悪が諸作用の善悪よりも根源的であり、人格の善悪が顧慮されるかぎりでのみ、諸作用の善悪が問われるという捉え方をするのである。したがって、善き意欲、善き行為は善い人格から生じてくるといふことになる。

以上のような諸作用の善と、人格自体の善は、愛し方が価値の位階を決定づけるという考え方によって次のように説明される。人格自体の善は正しい愛し方への普遍的適合性であり、諸作用の善は、それへの個別的適合性である、と。

先に見たように、人格価値は、価値序列の中の最高価値、すなわち聖価値の自体価値である。そして、聖価値に対応する感情状態、人格価値を基礎とする感情状態が、実質的価値倫理学の幸福にあた

る精神的感情の「淨福」である。このことを念頭におき、次にシェーラーの道德的価値論と感情の結び付き、とりわけ「淨福」と善の結び付きについてみていく。

## (二) 道德的価値と幸福

シェーラーは、意欲が生み出されるその出発点を、次の二つの側面から考える。まず一つめは、価値側面である。シェーラーによると、意欲は、その出発点において、何らかの価値を感得し、それによってその目標内容を設定する。価値の感得が意欲の意義要素を決定づけるからこそ、それは善惡の担い手となるわけである。彼はその意欲の目標内容を基礎づける何らかの価値の感得を実践的動機づけと呼ぶ。そして、今一つは感情状態である。たとえ意欲が何らかの価値の感得を出発点にしているとしても、意欲する主体の意識の上では、それはその都度の感情状態を出発点にしていることになる。シェーラーは、この意欲の出発点となる感情状態を意欲の源泉と呼ぶ。

シェーラーは、この意欲の源泉としての感情状態と価値方向の間に本質的な連関があると考えている。この場合の価値方向とは、価値側面からみた意欲の出発点において、その人がどのような価値をより高い価値として先取、感得するかということを意味している。したがって、価値方向とはその人の持つ価値の位階でもある。

シェーラーの考える感情状態と価値方向の本質的な連関には、次のようなものがある。それは、感情層の一番深い層において、絶望している人は、不快な状態を快感への努力志向によって代償するといふものである。シェーラーによると、人格の中心で絶望している人は、その都度の不快な状態を、より周辺層の快で、すなわちより手に入りやすい快感で埋め合わせしようとする。例えば、生命の弱った人が、感性的快楽を求めることは、精神的感情の層で、その人が絶望していることを表しているのである。シェーラーにとって、全ての快感への努力志向は、絶望をもとにしている。このこと

はまた、精神的感情の層における絶望が価値錯誤をもたらすものであることをも意味する。なぜなら、全ての快感情は価値に対応するものであるから、周辺層の快を目指すことは、価値序列のより低い価値を求めていることになるからである。そして、道徳的価値論から見れば、これは悪になる。以上のことから、次のことが言える。すなわち、シェーラーにとって、全ての快への努力は、価値錯誤であり、道徳的にも悪である。そして、それは人格中心の絶望を源泉としている、と。

感情状態と価値方向のもう一つの連関として、シェーラーは次のようなものを挙げている。それは、積極的でより高い価値を目指す全ての意志方向は、積極的な感情状態を源泉とする、というものである。これを道徳的価値論と併せて考えてみれば、善い意欲、そして善は、積極的な感情状態を源泉にしている、ということになる。シェーラーがここで言おうとしているのは、より高い価値の実現にむかう意欲、すなわち善い意欲は、一番深い幸福、淨福を源泉としているということである。彼は、人格価値に伴う感情が意欲とその都度の感情状態の源泉であると考え、次のように言う。「淨福な人格のみが善い意志を持ちうるのであり、絶望した人格のみが意欲や行為においてもまた悪いのでなければならぬ<sup>3</sup>。」以上のことから、シェーラーにおいては、淨福という感情状態が次の三つのことと同時に存在していることがわかる。一、その人格が正しい愛し方をしていいるということ、二、ア・プリオリな価値の位階を持つていること、三、人格の諸作用がより高い価値の実現を目指していること。シェーラーは感情状態をあくまで価値の感得にひきおこされたものとして存在するとした。しかし、感情層における一番深い層、精神的感情は例外で、それはその人のもつ価値の位階を先取りした、その人自身のうちにある表現のごときものである。したがって、淨福は善なる人格とともに存在し、その善なる諸作用の源泉となる。シェーラーにとって、幸福は善と一致するものなのである。

註

- 1 五十嵐靖彦 「マックス・シェーラーの『道德的価値論』」 弘前大学人文学部 「文経論叢」 第一五巻第一号、昭和五五年三月十日発行  
本節は上の論文を参考にさせて頂いた。
- 2 吉沢伝三郎訳 『シェーラー著作集』 第一巻、白水社、一九七六年、『倫理学における形式主義と実質的価値倫理学』 七八ページ
- 3 吉沢伝三郎訳 『シェーラー著作集』 第二巻、白水社、一九七六年、『倫理学における形式主義と実質的価値倫理学』 二九四ページ

参考文献

- 1 吉沢伝三郎訳 『シェーラー著作集』 第一巻、白水社、一九七六年、『倫理学における形式主義と実質的価値倫理学』
- 2 吉沢伝三郎訳 『シェーラー著作集』 第二巻、白水社、一九七六年、『倫理学における形式主義と実質的価値倫理学』
- 3 五十嵐靖彦 「マックス・シェーラーの『道德的価値論』」 弘前大学人文学部 「文経論叢」 第一五巻第一号、昭和五五年三月十日発行

4 五十嵐靖彦 「マックス・シェーラーの自由論」 弘前大学 人文学部「文経論叢」 第一九卷三  
号、昭和五九年三月二四日発行

5 小倉貞秀 『価値倫理学研究』、理想社、一九六八年

6 マンフレート・S・フリングス著、深谷昭三・高見保則訳 『マックス・シェーラーの倫理思想』、以文社、一九六八年